
銀河英雄年代史外伝 サーカスは星の間に

雨霧颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河英雄年代史外伝 サークスは星の間に

【Nコード】

N6090I

【作者名】

雨霧颯太

【あらすじ】

新帝国暦25年、オスカー・フォン・ロイエンタールの遺児フェリックス・ミッターマイヤーの命を受けたヴェルナー・テンシュテットは宇宙の海を航行していた。

全天周モニターから見える、かつて戦った船を見て、彼は6年前の壮烈な戦いを思い出す……

プロローグ（前書き）

銀河英雄伝説の二次創作小説です。

舞台はラインハルト崩御後のローエングラム王朝。分艦隊司令官ヴエルナーは司令官のフェリックス・ミッターマイヤーの命を受け、出撃する……

ほとんどがオリジナルキャラクターの物語です。

銀河英雄年代史正伝はころすけ@LB R 先生が執筆中です。

プロローグ

新帝国歴25年6月 フェリックス・ミッターマイヤー中将の命令を受けたヴェルナー・テンシュテット少将率いる半個艦隊5000隻はイゼルローン要塞を目指して航行していた。

艦橋の扉を開けた艦隊参謀長ナオ・リヒテンシュタイン准将は全周モニターを見上げ、一人宇宙を眺めている年下の司令官の姿を見つけた。

「星を見ているの？ ヴェルナー」

参謀長は尋ねたが、指揮シートに腰を下ろしたヴェルナーは一向に返事をしない。少しの時間を置いて、彼はようやく、自分の参謀長の存在に気づいた。

「あ……ああ、リヒテンシュタイン准将か。老けたな……グフウ！？」

彼が言い終わる前に、参謀長は拳を一発、司令官のみぞおちに入れていた。指揮シートにのめり込むかと思うほどの強烈な一撃に、眼鏡をかけた黒髪の司令官は体をくの字に曲げて痛みに耐えた。

「嫌ですわ、司令官閣下。色っぽくなったとおっしゃってくれなくては。おほほほ」

「ぐぐ、お互いに……と言おうとしたんだ、ナオさん……それに、俺は一応、分艦隊司令官だ……」

涙目のヴェルナーの抗弁を無視し、美貌の参謀長はうずくまる艦隊司令官の見下ろすと、軽く息を吐いた。

「いつまでも、デリカシーのない弟にお仕置きしただけよ。それに、いつまでそのくさい芝居をするつもり？ ガードしたの、ばれてるんだから」

ナオに気づかれて、ヴェルナーは痛がる振りをやめ、元の姿勢に戻っていると、。

「そうか。かなわないな卿には。実は、彼女を眺めていたんだ」

彼らの目線の先には、旗艦「サターン」に随伴する一隻の巡航艦があった。対空巡航艦「アジエナ」。彼らが初めてコンビを組み、戦った歴戦の艦である。

「6年前を思い出すな。あの時、俺は艦隊司令官ではなく、一介の巡航艦の艦長だった。今でもあの日のことを思い出すよ」

「私も6年前のあの日のことは忘れられないわ」

彼等2人は、静かにかつての乗艦だったアジエナを眺めた。

第一話 「孤立」

新帝国歴19年8月7日

ヴィクター・フォン・シュタインベルク大佐率いる100隻の小艦隊が、宇宙海賊の討伐の命を受け、ファラーファラ星域の辺境岩礁宙域に進撃した。

当初、宇宙海賊の規模は小規模であること、また、本拠地が岩礁宙域であり、大艦隊で進軍できないことから、100隻以下の小艦隊が編成された。巡航艦アジエナもその一隻として参加することになった。

艦隊はさしたる妨害も無く、岩礁宙域深部、海賊本拠地と思われる位置に到達した。

「妙だな……」

巡航艦アジエナ艦長、ヴェルナー・テンシュテット中佐はひとりこちた。

「はい。これまでさしたる妨害も無いのは不自然です。おそらく、深部まで我が艦隊を誘い込み、退路を絶って後、包囲、殲滅するのが狙いではないでしょうか」

副長のナオ・リヒテンシュタイン少佐もまた彼に同意し、自らの考えを述べた。

「卿もそう思うか。……けど、我々下っ端にはどうすることもでき

ないんだよなあ。お偉方の指示を待とうじゃないか」

そのときオペレーターより悲鳴にも似た報告が入ってきた。

「我が艦隊が背後より攻撃を受けています！！ 右から……いや、左からも！ 前方より艦影捕捉！！」

こうして、アジエナの長い戦闘が始まった。

包囲されながらも、司令官のシュタインベルク大佐は戦列を立て直すことに成功したが、もはや当初の目的を達することは不可能だった。シュタインベルク大佐は残存兵力をまとめ、艦隊は撤退戦を余儀なくされた。

アジエナ他数隻は殿になり、背後の敵を防いで撤退することになった。

海賊はゲリラ戦を展開、岩礁に潜み、襲撃、撤退を繰り返し、8月8日午前1時、シュタインベルク艦隊は壊滅、シュタインベルク大佐は戦死した。

退路を確保してきたアジエナ他も海賊達の巧妙な攻撃にそれぞれ分断、各個撃破されると、アジエナは戦場に孤立することになった。

第二話 「ヴェルナーサーカス（前編）」

「艦長……残されたのは本艦のみようです」

ナオは、気丈にしつつも諦めに似た声を絞り出した。

「そうか……」

ヴェルナーはメガネを少しもどした。

「それでは、われわれも退却するのでしょうか。……船医長、皆に酔い止めを配ってくれ」

艦長の突飛な命令に、船医長も年上の副長も首をかしげた。ヴェルナーはナオに顔を向け話しかけた。

「副長、卿も飲んでおくといい。これから、この艦は少し揺れるんでね。それから、マイクをくれ」

ヴェルナーは艦内の士気を高めるため、艦内放送をかけた。

「こちらは艦長のヴェルナー・テンシュテット中佐である。全員に酔い止めはいきわたったろうか。これから本艦も敵陣を突破し、オーデインに帰ることになる。少し荒っぽい操艦になるが、我慢してくれ。だが、船乗りが船酔いしたのでは、話にならん。無様に吐いたものは、一週間艦内掃除の刑だ」

笑い声が艦内にひびいた。

「さて、諸君。生き残って家に帰ろう。共に勝利の美酒にありつこう！」

艦内の空気が一変した。消沈していた士気がよみがえり、クルーは生還への意志に満ちあふれた。

「素晴らしい演説でしたわ。……きっと艦隊司令官でもやっていただけますわね」ナオは素直な賞賛の言葉を艦長に贈った。

「ありがとう副長。そのときは、ぜひ卿に参謀長をやってもらいたいものだ。だが、未来のことよりまずは今のことから片付けないとな。さあて、これから、ちょっとばかりしゆれるぞ。覚悟しておけ。戦闘開始だ！」

ヴェルナーの最大限の礼とともに、アジェナの第2ラウンドはスタートした。

第三話 「ヴェルナーサーカス（後編）」

たった一隻の巡航艦を沈めようと数十機の戦闘攻撃機が来襲した。

「敵機来襲、天頂方向！」

オペレーターの報告にヴェルナーは舌なめずりすると、全天周モニターとレーダーを睨み、必殺のタイミングをはかった。

「まだだ……もう少し、ひきつけるぞ。今だ！ 上甲板対空砲、一番から十二番発射！！」

敵機の射程距離に入ると同時に、数十本のエネルギービームが敵編隊に襲い掛かる。この回避不能の絶妙な距離からの飽和攻撃から逃げられたものは皆無だった。

「次、来ます！ 今度は、左右から！！」

「ようし！ 機関逆進！ 急制動！ 左右対空砲、対空ミサイル発射管、8番から16番発射！！」

敵機からは、アジエナは突然視界から消えたように見えただろう。確認するまもなく横からミサイルとビームをお見舞いされ、またも襲撃部隊は火球と化して消滅した。

艦が急制動をかけたため、艦内はゆれにゆれ、倒れるものが艦内で続出した。男を5、6人倒す腕っ節を持つナオですら例外ではなかった。

「きゃあ！！」

「悲鳴を上げる暇は無いぞ、副長。ちょっとばかり揺れるって言うただろう！？ 艦回転、バレルロール！！ 総員何かにつかまれ！！ 前部ミサイル発射管、全門発射！」

アジエナは横方向に宙返りし、円状にミサイルを次々と発射し、周囲にいた敵攻撃部隊を全滅させた。

「ちょっとばかりですって……」

指揮シートにつかまりながら、恨めしい目でナオは艦長の背中を見つめた。ヴェルナーはもはや軽口を叩くことはしなかった。副長にすら目を向けていなかった。彼は戦闘にすべてを集中していた。

「砲術長、主砲を前方の空間に撃て、レールガンもだ。斉射後、次は左に同様に斉射。頼むぞ」

砲術長は何も無い空間に砲撃を指示する艦長の意図をはかりかねていた。ヴェルナーはすぐに次の命令を下した。

「アデナウアー大尉、君のワルキューレ部隊が頼りだ。小物は叩き落すので、諸君らは大物をしとめてくれ」

そのとき、オペレータより報告が入った。

「艦長前方に艦影多数！！」

「我々の行く手を阻むつもりです。いかがしますか？」

ナオの問いに、ヴェルナーは軽い笑みをたたえて悠然と返すと、敵艦隊に目を向けた。

「大丈夫。考えることは皆、同じさ」

彼が言い終わらないうちに、前に撃った主砲の斉射が艦隊の鶴翼陣形に大穴を空けた。海賊艦隊は陣形の中央部、左翼に被害を受け、突破の隙をアジェナに与えた。

「今だ！ ミサイル全管発射！！」

無数のミサイルが残りの海賊達に襲い掛かる。小型艦や攻撃機は逃げ惑うが、数の多さに勝てず、爆発し、塵へと還っていった。

ナオはさっきの突飛な命令の意味を理解した。

「まさか。これを読んでいたのですか？」

「まあね。我々は敵さんから逃げているわけだし、それなら敵さんは我々の行く手を阻むように鶴翼陣形をしくはずだ。あとは、指揮艦がいそうな中央にアタリをつけて撃てば、どこかにあたるさ」

ヴェルナーとナオが会話をしているちょうどそのころ、飛行隊は敵艦隊に襲い掛かるうとしていた。

飛行隊長エーリッヒ・フォン・アデナウアー大尉は後世、この日の戦闘の事をこう記している。

『一戦闘機乗りとして、この日ほど敵パイロットに同情した日は無かった。アジェナは右へ左へ、宙返りと狭い回廊を縦横無尽に動

き回り、ミサイルやビームが敵機を包み込むように多数発射され、逃げられた攻撃機もアジェナに近づくことができる機体も皆無だった。そのようなまるで道化師が軽やかに舞う、派手なサーカスを見ているようだった。」

アデナウアー大尉率いる10機のワルキューレ隊は敵の対空放火をかいくぐり大型艦を次々に撃破した。

安全が確保されると、ヴェルナーは艦を加速させた。

「全速前進、一気に突っ走れ！！」

新帝国歴19年8月8日午前2時30分、巡航艦アジェナは海賊の囲みを突破することに成功した。

第四話「安堵、絶望。そして救援」

「どうにか生きて帰れそうですね」

ナオは安堵の声を漏らした。指揮シートに腰掛けたヴェルナーは眼鏡をかけ直すと、傍らに立つナオを見上げた。

「リヒテンシュタイン少佐。卿が本気でそう考えているとは思えないな」

「えっ……？」

「死に場所を求める目をしていた。生きて帰りたいと思っている者はそんな目をしていないさ」

敵艦隊に包囲されたとき、いつもは曇っているナオの目に一瞬希望の光が宿ったのをヴェルナーは見逃さなかった。ナオは凶星をつかれたのか、ぺたりと床に座り込んでしまった。

普段の気丈で冷静な副長とのギャップにヴェルナーは笑いを隠し切れなくなった。

「くくく……」

「何で笑うのよ！」

ナオはヴェルナーをにらみつけた。

「……いや、すまない。卿……いや、ナオさんがこんなかわいい一

面を持っているとは思わなかったんだ」

ヴェルナーは初めて副長の名を呼び微笑んだ。

「え……？ え？」

ナオの表情がまたも変わる。不謹慎だが、もう少しだけ副長の表情の変化を楽しんでいたと思うヴェルナーだったが、オペレーターの声が彼の意識を戦場に引き戻した。

「背後より敵艦。追ってきます」

「「機雷用意！ 敵の進路をふさげ！」」

ナオとヴェルナーは同時に指令を発していた。

ヴェルナーはにやりと笑った。

「考えることは同じ……だな。よし、後方の敵は副長に任せる」

ナオは敵の心理を逆手にとったトラップをいくつも仕掛け、後ろからの襲撃を防いだ。

こうして、敵機の間断ない襲来をことごとく回避、撃退したものの、弾薬と兵士の集中力は次第に切れていった。それでもやっつのことで、回廊出口にたどり着くことに成功したアジエナであったが、彼らを待っていたのは海賊艦隊に姿を変えた絶望だった。

「艦隊前方。艦影多数……数、100隻以上」

オペレーターが告げる悲痛な事実には、皆、すべてを諦めるほかなかった。ナオもまた非情な報告をしなければならなかった。

「艦長……すでにエネルギーも、ミサイルも底を突いています。ワルキューレ部隊も3機を残し全滅しました。残りのワルキューレも、もはや補給する弾薬もエネルギーもありません」

「これまでか……」

いつも楽天的なヴェルナーも諦めかけたそのとき、数万本のエネルギービームのシャワーが前方の艦隊に降り注ぎ、海賊艦隊を一瞬のうちに洗い流した。

オペレーターの声は歓喜を帯びた声に変わった。

「艦長、救援です！！ランベルツ艦隊が救援に来てくれました！！」

救難信号をキャッチした近くのハインリッヒ・ランベルツ中将率いる艦隊が救援にやってきたのだ。

救援艦隊より通信が入ってきた。

「こちらは、帝国軍ランベルツ艦隊司令官、ハインリッヒ・ランベルツ中将である。巡航艦アジエナ。応答せよ」

ナオもヴェルナーもようやく安堵した。

「助かったのね。私たち……」

ヴェルナーは、指揮シートに崩れ落ち、年上の副長の名前を口にしていた。

「ふう、助かった。……ナオさん。すまないが、起こしてくれないか？　実は、腰が抜けてしまって、立てないんだ」

ナオもまた笑って、世話のかかる弟を見るような穏やかな目で年下の艦長を見つめ、助け起こした。

「しっかりしなさい、ヴェルナー。ほら、ランベルツ中將から連絡が入っているわよ」

新帝国歴19年8月8日午前10時。戦闘が終結し、艦隊はオーデインを指して帰路についた。

エピソード

「あれから、卿は変わったな。切れ味の鋭い刃のようだったのに、穏やかになった」

ヴェルナーはアジエナから一歳年上の参謀長に視線を戻した。

「あら、できの悪い弟を持つと、姉は苦勞するものよ。ヴェルナー」
「本当になわなないな。ナオさんには」

長い金髪をかきあげて、微笑むナオに、ヴェルナーは苦笑した。

あれから6年、2人はコンビを組み、幾多の戦場を渡り歩いた。彼等率いる艦隊はその猛烈な対空放火と艦隊機動から、「ヴェルナー・サーカス」の異名を持つまでになった。そして、今新たな戦場に出撃している。

かつての乗艦を見つめる2人の間に、ふと沈黙が現れたが、オペレーターの報告が、彼らを現実に戻した。

「司令官、参謀長。ジンガー少将の艦隊からの救難信号をキャッチしました。『未確認の艦隊と交戦中。至急来援を請う』とのことですよ」

「やれやれ……どうやら卿の悪い予感であたったな。急いで救援に行かなければ。全艦、全速前進。ただちにジンガー艦隊と合流する」

ヴェルナーは、腕を振り上げ、命令を下した。ナオは凜々しくも、

どこか放っておけない眼鏡の司令官に微笑むと腕を組み、傍らに立った。エンジンが低いうなりを上げ、艦隊は速度を増していく。全天周モニターから見える星の海をヴェルナーは見つめた。平和を守るために、傍らに立つ大事な人を守るために、戦うのだと。彼の目は生きる意志と気迫に満ちていた。

新帝国歴25年　新たな事件がまた幕を開けようとしていた。

銀河の歴史がまた一ページ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6090i/>

銀河英雄年代史外伝 サークスは星の間に

2010年10月10日21時53分発行